NY エッセイ 77

中瀬有紀

舞台に明かりを灯す理由



テックテーブルとステージ

現在大学4年生で演劇学を専攻している優秀な生徒が、「大学を卒業したら私、演劇からも卒業するんだぁ」と普通に話していて、私は少し驚きました。その大学で私が照明デザインをした演劇公演において照明卓プログラマーとして働いた彼女は、ETC社のElement卓をマニュアル片手に自分で学んでマスターする努力家で、彼女の4年間は演劇一色だったと楽しそうに話します。「そんなに演劇が好きなのに、やめようと思うのはどうして?」と聞くと、「だって稼げないでしょ?」と逆に質問されました。ゲスト・デザイナーという肩書きで招かれ、多少なりとも講義までさせていただいた身としては、私が知りうる業界の現実をお伝えする役割を担いつつも生徒たちの夢と希望を後押しする立場と自覚していたので、答えに少し戸惑いました。

演劇、ミュージカル、オペラ、ダンスのデザインだけで生計を立てるのが困難なのは、過去のニューヨーク・エッセイにも何度か書かせていただいたとおりです。ブロードウェイで活躍する舞台芸術のデザイナーでも、映画、テレビ、イベント、建築などの照明に携わったり、大学や大学院で教鞭をとっていたり、定期的な収入を確保する何らかの副業をもっていることが珍しくありません。どんな職業にもそれぞれに全く異なる種類の挑戦と面白味があるため、給与所得や福利厚生を求めて始めた副業がデザイナーの人生にとって本業のデザインと同じかそれを超える意味をもたらすこともあります。そのため、彼らは一年中ほぼ休みなく働き続けることになり、それだけ働いても日々の生活と家族を養うのに精一杯だと聞きます。また、舞台制作が特に富裕層の個人的な寄付によって支えられているように、アメリカ社会において芸術に貢献することは社会的地位の高さの証であり、デザイナーが金銭的に多少の無理をしてでも仕事を引き受けることがあるのはそのためかなと考えることがあります。したがって舞台芸術から提示額以上のデザイン料を確保しようと試みることは、経済力の低さを開示すると同時に芸術という聖域を汚すような嫌味があり、金額の交渉をしづらくしているようにも感じます。舞台芸術が“お金にならない”のは残念ながら事実と言わざるを得ません。したがって、どうして舞台芸術のデザインという仕事を選び続けるのか、しっかり自覚して言語化しておく必要がありそうです。

私は現在リージョナル・シアターで照明デザイナーとして従事している演劇公演の休館日にこのエッセイを書いていますが、その演劇制作の一員に選んでいただいたことを心から感謝しています。70年代メキシコの小さな町に生きる8人の20代から40代の主婦が戦争に行った夫を待つ姿を描く話は、私と何の関わりもないように見えますが、彼女たちが夫を戦争で失う痛みとその傷を乗り越えてともに強く生きる姿と言葉は、夫を亡くしたときの私の母の姿にとても似ています。お葬式に向かう母に私はお化粧をしてあげましたが、そんな場面が演劇の中にも出てきます。お花に囲まれている父の遺体とその前に立って力強く話す母の姿は、まるで美しい演劇のようだったと思い出し、哀しみこそが世界を鮮やかに彩る、そんな臨場感を求めて明かりを設定しました。私が舞台芸術を職業として選ぶのは、この世に生を受けたことがどんなに有難いことかの気づきを舞台芸術がもたらし、そして、人生が課す時間内に私が得意なことを生かしてどう社会に貢献できるか考えた末の結果です。先述の生徒には、ぎりぎりの綱渡りのような毎日に生きるデザイナーを支えてくれる理解あるリージョナル・シアターがあること、そして彼女自身がとても優秀であることを伝えました。彼女のような若い才能が舞台芸術にさらなる発展をもたらすことを願って。